

藤森照信の茶室学

藤森照信 著

第一章 茶室に目覚めたわけ

■著者と茶室

はじめて茶室の設計を依頼された際、工事中に訪れた煎茶道の先生から
炉は千利休の茶の湯のものであり、煎茶では使わないと教わる。

→それまで茶室について新たに論じることはないと考えていた著者だが
茶室にはまだ考えるべきことが残っていると知り、調べ始める

■外国における茶のための空間

○ヨーロッパの場合

歴史主義の邸宅にはコーヒー、煙草を嗜む空間としてそれぞれトルコ風、
エジプト風の設えがなされる、紅茶を嗜むための空間はない

○中国の場合

茶は書斎という文化的空間で嗜まれるが、茶のためだけの空間はない

では外国と比較して日本は？

茶道は茶碗の中味よりも作法、茶道具、床の飾りといった外側に敏感
しかし、それらの器である茶室への関心は薄い→日本の茶室の不幸

■茶室観を変えた二つの茶室

ひとつは先述の炉の件があった「矩庵」

もうひとつは矩庵と同時進行でつくり、先に完成した「一夜亭」

一夜亭は大きな窓があるものの、茶室の壺中天効果は損なわれなかった
→にじり口をくぐるとき、意識が一瞬断絶するため

第二章 日本の茶室のはじまり

■会所で行われた闘茶

茶室の始まりは南北朝時代に闘茶が行われた「会所」とであるといえる

会所とは？

平安時代から鎌倉時代、室町時代にかけて寝殿造が書院造へ変化してい
く過程で、対屋の一つが寝殿から独立し、親しい仲間が集まって楽しむ
ための場へ変化したもの。基本的な広さは三間四方＝九間（このま）
であり、そのガランドウの場を飾り立てて闘茶を催した。

・一時とはいえ茶だけのための空間が許されたこと

・茶碗や美術工芸品といったものを賭けるものだったこと

・身分や富の差によらず公平な「一座建立」の場であったこと

これらの会所と闘茶の特性が、茶の中味よりも外側の作法と鑑賞に意を
注ぐ後の茶文化、茶室の空間につながったのではないだろうか

■書院造における殿中の茶

南北朝時代が終わると、茶の空間は会所から日々の暮らしのための空間
である書院造の中へと移った。ガランドウの場を想像力の赴くままに飾
り作り上げた闘茶の空間と比べ、畳の上と床の間に中国由来の品々を置
いただけの殿中の茶の空間は書院造の日陰の花といえるものだった。

第三章 利休の茶室

■わびとしての茶の湯

安土桃山時代は和漢洋混在の天守の登場、豪華絢爛な書院造のピークの
時代に当たる中、なぜ利休の二畳程度の茶室が成立するのか？

草庵での超俗とは、俗世を生きる力とその経験を前提としながら俗の場
抜けて別の場へ移ることを意味する。

→草庵は俗世を批判し相対化する作用を果たす

■草庵茶室の成立過程

鎌倉時代

・日本に禅宗が入り都の外れに草庵が結ばれるようになる

室町時代

・珠光が茶室を四畳半とし、わびへの第一歩を踏み出す

・紹鷗が茶室の向きを北向きとし、躡口の原型も実現する

→草庵の流れと茶の流れが一体化し、草庵茶室が成立した

■千利休の登場

○信長と利休

利休は信長に茶頭として仕えたが、信長に茶そのものへの関心は無かつ
た。利休は安土城にて工夫や趣向が空間の力によってかき消されてしま
う経験を経て、茶室を根本から変える決意を固めたのではないだろうか。

○秀吉と利休、待庵の誕生

信長の没後、利休は秀吉に仕える。秀吉は茶への関心が強く、利休の才
も大切にした。利休は僅か一坪の〈待庵〉を作り出すに至った。

待庵で利休は目と体のための床の間と畳という最低限の二つの要素だけ
を残し、書院造の到達点を取り去り、汚し、切り捨てた。戦場でのブリ
コラージュを楽しみながら生まれたものである。さらにいえば住まいと
建築の極小単位を探ろうとした結果生まれたものとも考えられる。

■わび茶の極意は反転

珠光の師である一休と森待女の関係と同様、利休と秀吉の関係も正反対
のものが隣り合い、正と反が互いを包むようなものといえる。堺では町
の中に外の田園や草庵が反転して入り込み、利休の極小茶室では大阪城
や聚楽第、さらには秀吉という存在も反転して呑み込まれる。

第四章 利休の後

■利休没後の茶室

利休の没後、茶室に新しい空間を生んだのは宗旦、織部、有楽、遠州とい
った利休直結の世代まで。最大の変化は、茶室内に身分と立場の上下を
持ち込んだこと。その後、茶室は没落していく。

■数寄屋造の誕生

織部が推奨した鎖の間（書院と茶室をつなぐ）から住宅の新たなスタイル
として数寄屋造が生まれる

■煎茶席の作り

茶の湯を凌いで煎茶が一般的になった幕末から明治期にかけて煎茶の専
用茶室が出現したが、一過性のものであり続かなかった。

第五章 建築家の茶室

■初の茶室論

武田五一：初めて茶室について論じた。伊東忠太の教え子
利休が様式を定めず、それぞれが自分の美意識に従って芸術表現を展開
できるようにし、茶室建築に新しい光を導いた点を評価した。
→歴史主義や地域的様式観へ批判的な立場も窺える

■武田五一とアールヌーヴォーの出会い

武田は留学先でアールヌーヴォーと出会う。アールヌーヴォーこそ、脱
歴史主義の運動の始まりであり、脱様式を求める武田も当然共感する。

■藤井厚二の聴竹居

武田の後を継いだ藤井により〈聴竹居〉が完成

→抽象的な構成原理が用いられており、日本の木造でもって 20 世紀
建築の先端を切り拓く“木造モダニズム”の流れが生まれる

■堀口捨己の登場、二つ目の茶室論

堀口は史上二つ目となる茶室論を二度に分けて著した
一度目は茶室の始原性、自然性、20 世紀建築と通底する世界観を見出し、
武田と異なる視点から“茶室の意味の発見”をした。
二度目では茶室の持つ構成的手法とそれによる自由無碍を見出し、武田
と同じ視点からより深く広く論じた。

一方、自身の設計では数寄屋造の開放性へと向かっていった
→これでは利休の核心である“反転”の想いに届いていない

第六章 戦後の茶室と極小空間

■茶室に近寄らなかった堀口以降の世代

構造表現主義の潮流から、戦後の建築家は茶室の設計を避けた
一方、村野藤吾や白井晟一らは時代に反してでも秘かに茶室を手掛けた

■ポストモダンの誕生

ポストモダン以降、建築家が茶室を手掛けるようになったほか、茶室以
外のビルディングタイプにも極小化傾向がみられる

■藤森流茶室論

茶室は誰が作っても茶室になり、誰が手掛けても茶室にしかない
→どうしたらこのワナに嵌らず、建築の原始的喜びを回復できるのか

第七章 だから、茶室はやめられない

■茶室は盲腸のようなもの

茶室はどういう働きをしているのかわからないが、何かを伝えてはいる

■茶室はヤニっぽい＝女々しいもの

茶室は妾の建物とされ、伝統的な日本建築の正統からは区別されてきた

■衣服に一番近い建築

・茶室はお寺の対極、唯一本気で取り組まれたブリコラージュの建築
・軽さ、薄さという点では世界的にいうと石造の対極

→身体性を持った衣服に一番近い建築

茶室の面白さは感覚をすべて内に向ける一種の壺中天であること